マデイラ島の「いかがわしい商人」

Jane Eyre における遺産相続とマデイラ・ワイン

大澤　舞

***Jane Eyre* における「いかがわしい商人」の表象**

Charlotte Brontë の *Jane Eyre*（1847）において、大西洋上にあるポルトガル領マデイラへの言及は見落とされがちである。Jane はマデイラ島でワイン商をしていたらしい叔父の John Eyre から遺産を相続する。Jane の伯母の Mrs Reed は、彼を「いかがわしい商人（a sneaking tradesman）」と評した（第 10 章）。この遺産相続について、批評家たちはマデイラを「植民地」とし、そこで築かれた資産により Jane は経済的に自立し、Edward Rochester とも平等な結婚を実現したと論じてきた。たしかに彼らの男女平等な結婚のためには、結婚を経済的に補完する遺産が重要だが、なぜそれがイギリスの「植民地」ではなくポルトガル領のマデイラ島で築かれた資産なのか、という点についてはこれまで注目されてこなかった。そこで本発表では、マデイラ・ワイン貿易の歴史的背景を明らかにすることによって、*Jane Eyre* における「いかがわしい」イギリス商人の富が Jane と Rochester の平等な結婚にどのような意味をもたらすのかを検討した。

Jane Eyre といえば、ジャマイカ出身の Bertha Mason の存在が議論されてきた。Gayatri Spivak や Susan Meyer は彼女の人種の問題に焦点を当て、帝国主義のイデオロギーをポストコロニアリズムの視点から論じた。彼女たちは、西インド諸島の植民地出身の女性を登場させることで、Brontë がこのドメスティックな小説に大英帝国の広がりをもたらしている、と解釈している。

だが、Jane の遺産の出処に注目すると、イギリス商人たちのグローバル・ネットワークが見えてくる。第 10 章にて、Lowood にいる Jane のもとに、Mrs Reed の子ども達の乳母だった Bessie が Lowood を訪ねてくる。Bessie は Jane の叔父が Mrs Reed の屋敷に来たと話す。

‘What foreign country was he [Jane’s uncle John Eyre] going to, Bessie?’
‘<u>An island</u> thousands of miles off, where they make <u>wine</u>—the butler did tell me—’
‘<u>Madeira?</u>’ I suggested.
‘Yes; that is it—that is the very word.’
‘So he went?’
‘Yes; he did not stay many minutes in the house: Missis [Jane’s aunt Mrs Reed] was very high with him; she called him afterwards <u>a “sneaking tradesman.”</u> My Robert believes he was <u>a wine merchant.</u>’
‘Very likely,’ I returned; ‘or <u>perhaps clerk or agent to a wine merchant.</u>’ (第 10 章、下線は引用者)

ここで注目すべき点がふたつある。ひとつは、John Eyre の向かった先について Bessie が「ワインを作っている遠くの島」と示唆すると、Jane はすぐさま「マデイラ？」と応答し、さらに叔父の仕事を「ワイン商」もしくはその「事務員か代理人」と推測していること。もうひとつは、Mrs Reed が John Eyre のことを“a sneaking tradesman”と呼んだことである。この“sneaking”にはどのような含意があるのだろうか。まず前者について、第 1 セクションでマデイラ（ワイン）とイギリスの関係を確認した。後者については第 2 セクションで考察し、結婚の意味の再解釈を試みた。

1.　Jane の遺産はどこから来たのか？

上に引用した Bessie の訪問は、読者に対し、Jane にはマデイラでワイン商をしていると思われる叔父がいるという設定を伝える機能を果たす。Rochester の財産との関連において Bertha をひとつの「謎」とするならば、Jane の潜在的財産との関係において叔父はもうひとつの「謎」である。小説の後半では、Jane が叔父から遺産を相続することとなる。叔父の詳細は「謎」のまま物語は展開するが、Jane と Rochester の平等な結婚のためにはこの「謎」の解決が必要となる。では、ポルトガル領マデイラとは何か。

イギリスとポルトガルは 1386 年のウィンザー条約の締結以来、協力関係が続いていた。スペインやフランスと対立していたイギリスにとって、ポルトガルは政治的に重要な存在であった。そしてポルトガル領マデイラ島はイギリス商人にとって必要不可欠となった。

マデイラ島は 1425 年からポルトガル人による植民が始まった。彼らは 1461 年頃には奴隷貿易を行ないなが

ら砂糖を主要輸出品としてポルトガル本土やアフリカの市場などに輸出していた。しかし 1506 年には砂糖の生産が減り、ワインを主要輸出品へと切り替えた。このサトウキビ・プランテーションの衰退や奴隷の価格高騰につれ、17 世紀には奴隷貿易も衰退した。1590 年以降にはイギリス商人たちがマデイラに移住し始め、1640 年頃にはワイン貿易を開始した。この頃になると、distributor（商人、仲介人、販売受託者、代理受託者など）が出現してくる。

1660 年の航海条例では、イギリスは自国の植民地にロンドン発のイギリス船以外の入港を認めない方針を打ち出すが、63 年の指定市場法によりマデイラ島から直接イギリスの植民地へのワインの提供が認められた。この法により、イギリス商人たちの特権が認められ、イギリスは西インド諸島やアメリカの農園との交易で事実上独占した。また、イギリスとポルトガル間で締結された 1703 年のメシュエン条約では、ポルトガル・ワインが低い関税でイギリスに輸出されるようになる。そしてイギリスのウール生地は無関税でマデイラを含むポルトガルに輸出することが取り決められた。

以上の背景をもとに、イギリス、マデイラ、そして北米と西インド諸島の間で、三角貿易が確立された。イギリスからマデイラへは織物、マデイラから北米／西インド諸島へはマデイラ・ワイン、そして北米／西インド諸島からイギリスへは砂糖とタバコに加え富も流れ込んだ。18 世紀には市場はさらに拡大し、イギリス商人によるマデイラ・ワイン貿易の輸出先はこれまでの北米／西インド諸島に加え、イギリス領以外の地域も含む東インドにまで広がった。このようにして、イギリス商人たちはマデイラ・ワイン貿易で利益を得ていたことが歴史的に明らかである。

Jane の遺産相続は、以上の歴史的背景を踏まえて考えねばならない。John Eyre はマデイラ島に移住し、マデイラ・ワインのグローバルな交易に distributor として携わっていたと推測される。そしてそのグローバル・ネットワークによって築かれた資産がまさに Jane の元へと届く。Rochester の経済基盤がジャマイカでの大農園経営にあったのに対し、Jane のそれは、マデイラ・ワイン貿易による叔父の資産に支えられるのである。

2. “a sneaking tradesman”とは？

Mrs Reed は John Eyre を“a sneaking tradesman”と呼ぶ。Susan Meyer は John Eyre について、「叔父の富が奴隷貿易を示唆している」と指摘する。しかし、歴史的事実と照らし合わせると、「マデイラ・ワイン」＝「奴隷の労働の搾取」という連想には一定の保留が必要である。なぜなら、David Hancock によれば、マデイラ島における奴隷は 17 世紀にはコスト高騰などの理由からワイン生産のためには使われなくなったからだ。

むしろ私は“a sneaking tradesman”という表現が奴隷との関わりを示唆するものではなく、階級の問題が関わってくることを主張した。これまで階級と言えば、Rochester のように西インド諸島で大農園経営を経済基盤としていた地主階級と、ガヴァネスとしての Jane の階級の違いが論じられてきた。しかし、マデイラに注目すると、「新興中流階級」としての貿易商の重要性を *Jane Eyre* の中に見出せる。元々身分の低かった Jane の叔父はイギリスで「投機」（第 30 章）に失敗し破産した後、地主階級のいない外国であるマデイラ島で、経済基盤となる土地を所有せずとも貿易の国際的なネットワークを活かして成り上がり、「立派な紳士」（第 10 章）になる。上層中流階級である Mrs Reed や、大英帝国の典型的な地主階級である Rochester とは異なり、John Eyre は何処で何を（こそこそ）して稼いでいるのか分からないという“sneaking”の意味合いも含め、台頭する貿易商に対する階級的蔑視を込めて“a sneaking tradesman”と呼んだのではないだろうか。

物語の最後における Jane と Rochester の結婚を通して、この“a sneaking tradesman”は、西インド諸島の大農園経営の上流階級的資産から、新興中流階級的イギリス商人のグローバルなネットワークによる資産への移行を表象している。Meyer の指摘のように、この小説の舞台がジャマイカの奴隷解放の時代の前とするならば、Thornfield の炎上は奴隷解放による西インド諸島の植民地経営の終焉が間近に迫っていることを象徴していることとなる。しかし Rochester の豊かな経済の維持が難しくなるとしても、John Eyre の遺産のように別の空間で国際的なネットワークを活かすイギリス商人の富が台頭しているため、彼らの結婚が不安のないものであることを意味する。そしてこの結婚を通して、この作品はイギリス経済の構造的変化を表象しているのである。

参考文献

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. London: Penguin Classics, 2006.
Hancock, David. *Oceans of Wine: Madeira and the Emergence of American Trade and Taste*. New Haven: Yale UP, 2009.
Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca and London: Cornell UP, 1996.
坂本優一郎『投資社会の勃興——財政金融革命の波及とイギリス』、名古屋大学出版会、2015 年。